



中华人民共和国成立70周年
The 70th Anniversary of the Founding of
The People's Republic of China

日本人70名が

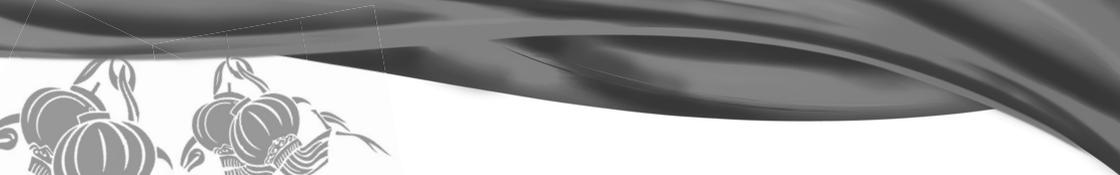
見た 感じた 驚いた

新中国70年の 変化と発展

笹川陽平 島田晴雄 近藤昭一 西田実仁
伊佐進一 小島康誉 池谷田鶴子 など70人著

段躍中 編





中国滞在を通して見た中国の変化と発展 —— 伊佐進一

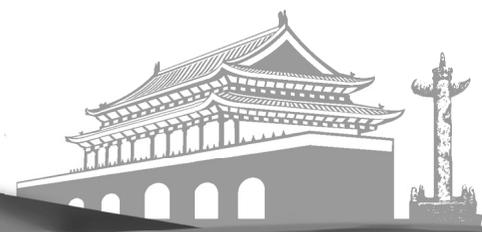
バックパッカーと 日中関係

自分で歩き、自分で見た等身大の中国

私と中国との思い出の多くは、中国人との思い出でもあります。以前から中国の研究をしていた私は、自らの肌で中国を感じたいとの思いにかられ、2002年に中国に渡りました。

北京で語学を学んだ後、バックパッカーとして中国大陸を旅しているうちに、様々な出会いを通して中国人の気質を知り、その根底にある「優しさ」と「逞しさ」を信じていることができるようになりました。

中国が建国70周年を迎え、今後の二国間関係の未来を考えると、国交正常化以前から続いてきた民間交流こそがその要なのだと私は思います。





伊佐進一

(いさしんいち)

財務大臣政務官、衆議院議員

財務大臣政務官、衆議院議員（三期連続当選）。東京大学工学部航空宇宙工学科卒。1997年より文科省職員。2003年、米国ジョージタウン大学国際高等問題研究大学院（SAIS）にて、中国研究で修士号取得。2007年より、在中国日本大使館一等書記官。帰国後、ものづくりや科学技術における日中連携を訴えた『科学技術大国 中国の真実』（講談社新書、2010年）は大きな評判を呼んだ。2012年衆議院議員初当選。現在は、若手国会議員による超党派の「日中次世代交流委員会」事務局長として、日中関係の発展に力を入れる。

高校時代、吉川英治の「三国志」に魅了され、何度も何度も読み返し、いつかこの悠久の黄土に立ってみたいと思ったのが、私の「中国」の始まりでした。

それ以降、大学の第二外国語では中国語を選択し、米国の大学院に留学しても中国の研究をし、そしてやがて北京の大使館で三年間、書記官として働くことになりました。国会議員になった今でも、日中関係の発展のために、微力ながら力を尽くしていこうと思っています。

中国との思い出を語るときには、その多くは、中国人との思い出でもあります。率直で、情に厚くて、普段は素っ気ないのに、友人になると暑苦しいくらいに距離が近くなる中国人の気質は、われわれ関西人にとっては馴染み易さを感じます。

二〇〇一年から、米国の東海岸で中国の研究をしていた私は、机の上の理論ではなく、自らの目で中国を見たい、自らの肌で中国を感じたいとの思いに強烈にとらわれました。そして二〇〇二年、三カ月にもなる長い夏休みの到来とともに、悠久の黄土にまみれてみよう、海を渡りました。

最初の数週間は、北京で語学学校に通いつつ、三カ月間の過ごし方について作戦を練りまし



た。とにかく、都市だけでなく地方も見たい、多様な中国の生活を自ら感じたいと思い、バックパッカーとなって放浪する道を選びました。中国の地図を広げ、北京から香港まで、ぐるつと反時計回りに円を描く。その円の上にある行きたい場所に丸をつけて、電車やバスを乗り継いで、時間の許す限り行けるところまで行ってみる。こんな「緻密」な計画でした。

この思いは、のちに大使館の職員となったときも、変わりませんでした。外交の最前線の北京で、中国政府と交渉を重ねるだけでは、本当の中国はわからない。この思いで、夫婦でバックパッカーとなって、そこかしこを旅し続けました。

旅の間、様々な出会いがありました。たくさん中国人から、その「優しさ」と「逞しさ」を学びました。

北京からの普通列車で旅を始めてすぐ、たまたま前に座った年配の女性と話が弾みました。誰も急がない、各駅停車の旅。三時間、四時間と話しこんだところ、ふとしたきっかけで、問題に気付きました。北京で調達したプリペイドの携帯電話の残金が、すでに切れてしまっていたと話ができません。北京ローカルの安い携帯電話だったため、北京でしかチャージできなかったように記憶しています。用意周到の「緻密」な計画で出発したはずが、いきなり最初からつまづいたのです。

困り果てた私の様子を見て、彼女は言いました。「私の北京の友人から、あなたの携帯番号にチャージしてあげる。百元あれば、旅の間は何とかなるわよね?」。彼女は親切にも北京に連絡をとり、私の携帯にチャージしてくれました。おかげで旅の間中、携帯を使うことができたのですが、その彼女にお礼を言って百元を渡そうとしました。すると彼女はこう言いました。「そんなの、もらえない。だって、あなたは友人だから」

私は、びっくりしました。いくら三、四時間話したといっても、初対面です。その私を「友人」と言い、しかも百元もの大金をくれようというのです。私が何度百元札を渡そうとしても、彼女は最後まで受け取りませんでした。中国では、一度心が通うと、友人になります。そして、友人が困ったとき、中国人は惜しむことなく助けてくれます。この「優しさ」を気づかされた旅のスタートでした。何もない荒野をのろろ走る列車の中、中国人の「優しさ」を感じながら、ゴトゴト揺れる振動に身を任せて思いにふけったことを、いまでも鮮明に覚えています。

「敦煌料理店」のご主人には、本当にお世話になりました。

当時、敦煌には空港もなく、列車やバスを乗り継いでいくしかありません。ようやく、あこ



中国奥地の少数民族とともに、踊りを楽しむ

がれだった敦煌に到着してガイドブックを開くと、日本語の話せるご主人がいて日本人バックパッカーが集まる料理店があるとのこと。早速その店に足を延ばすと、確かに日本人らしき数人の学生がいて、大皿の料理に箸をつついています。私が日本人であることを主人に告げると大歓迎してくれました。ご主人は、以前、少しだけ日本で働いたことがあり、そのときに優しい日本人に世話になったとのこと。

料理を注文し、久しぶりにいっぱいになったお腹を抱えて会計をしようとすると、予想以上に安いです。メニューに書いていた値段よりはるかに安いので、間違いではないかとご主人に言ったら、「いや、それでいいんだ」の一点張り。周りに聞いたら、とりわけお金のなさそうなの若い日本人には、いつもこうなんだそうです。結局、敦煌滞在中は毎回、法定外（!?）の安さで食事をさせて頂きました。そして旅立つ前夜には、アルコール度数五十三度の白酒を、しこたま頂きました。長旅をするバックパッカーにとって、食費をいかに削るかが大きな課題です。敦煌まで旅してきた私にとって、だいたいどれくらい予算が不足するかが見えてきたところですよ。節約を心掛けようとしていた矢先に、「敦煌料理店」に出合いました。このご主人に、どれほど元気とエネルギーを頂いたか。

時は流れ、大使館職員となった際、敦煌に出張する機会がありました。その際、せめてご主人に会ってお礼を申し上げようと、かつて「敦煌料理店」のあったところを尋ねました。ところが、影も形もありません。周りのお店に聞いたところ、なんと、私が来るつい数週間前に店をたたんだとのこと。あの思い出の「敦煌料理店」は、もはや記憶の中にしか存在しません。そのときの美しい光景は、いまでも私の中でそのままに凍結され、しずかに息づいています。

四川省の山奥、チベット族がたくさん住む地域をローカルバスで旅したことも、私にとって良い思い出です。おんぼろの乗り合いバスで、また道路が舗装されていないこともあって、上下に左右に大きく揺れながら山道を進んでいきます。停車場なんてありません。突然、乗客の大きな声が響いたかと思うと、バスは急停車、声の主が降りていきます。また、

道すがらたたずんでいる人を見つけては、バスはとまり、大きな荷物とともに客人が乗り込めます。

進むにつれてバスはいっぱいになり、やがて通路に立ったままの人がでできます。しかしそれでも、大きい荷物とともに乗り込んでくる人たちは後を絶ちません。最後は、まるで日本の通勤ラッシュのようになってしまいました。ゴトゴト揺れながら進むバスの前方には、ヤギを二匹抱えたおじさんがこちらを見つめて、たたずんでいます。すでにバスはギューギュー。「これ以上は、絶対にもう入らないだろう」と思った状態でしたが、それでもバスは止まりました。すると、乗客も手慣れたもので、何とか場所を作ってあげようと、みんなで「よいしょっ」と奥のほうに少しずつ自分の身体を押しこんでいきます。そしてついに、乗り込むことに成功した「ヤギおじさん」は、なんと、当然のように一匹のヤギを私のひざの上に、もう一匹を私の隣のおばさんの上に乗せました。私がつくりして、その隣のおばさんのほうに目をやると、おばさんは当然のように、ヤギをひざの上で抱えています。私は面食らいました。日本の満員電車では、ここまでの譲り合いの精神はありません。生きるためにはともに助け合う、中国人の「逞しさ」を学びました。

中国を旅すると、いろんなハプニングがあります。雲南省大理で、病院に入院したこともありました。新疆ウイグル自治区で、突然結婚式に招待されたこともありました。でも、そんな経験や思い出の積み重ねが、私のいまの「中国観」となっていることは、間違いありません。仕事の上で様々なハプニングや問題があっても、中国人の根底にある「優しさ」や「逞しさ」を信じてことができます。

結局、国と国の関係も、そういうことなんだと思います。とりわけ日中関係は、そういうことだと思えます。日中関係には、他の二国間関係にはない特殊性があります。それは、国交正常化の夜明け前から、あるいは日中関係が必ずしも良くない時期においてまで、常に、民間交流が主役でした。民間の交流が二国間関係を引っ張ってきました。だからこそ、日中の民間交流は、他の二国間関係にはない重要性を持っています。そしてそれは、一人一人の交流の思い出に他なりません。良いことも悪いことも含めて、中国との交流の思い出、滞在の思い出こそが、一人一人の「中国観」であると同時に、二国間関係の未来だと確信しています。

今後、バックパッカー精神を忘れることなく、良い面も悪い面も、等身大の中国と向き合い、つきあい、思い出を作り続けていきたいと思えます。

